

◎事例からみるコンベンションの効果と今後

① フランス映画祭横浜

■芳賀宏江

はじめに

ジャン・ギャバンやアラン・ドロンにカトリーヌ・ドヌーブ、はたまたアラン・レネやゴダール、トリュフォーなどの監督たち。「往年の」、という形容詞がつくことの多いフランス映画だが、どっこい今も元気である。

最近ではアメリカ映画に押され気味といわれているが、日常の生活の中でふと忘れていたことどもを思い出させてくれる作品、人と人との関係の機微をサラリと描く作品など、あくまでも基本をユマニテ(humanité)とする姿勢は、フランス映画ならではのものだろう。

このフランス映画のアジアにおける一大プロモーションのステージがここ横浜で展開され、今回で六回目を迎えた。横浜の特色ある

「コンベンション」であるこの映画祭を紹介し、今後の発展の可能性を考えてみる。

1 横浜とフランス映画祭

① なれそれ

なぜ「フランス映画祭」か、といえはこれこそ文化国家を誇るフランス政府の文化産業政策の賜物といえよう。フランス文化省の外郭団体にあたる「ユニフランス・フィルム・インターナショナル」(以下、ユニフランスという)が、自国の映画産業振興のために海外へのプロモーションを進めていく活動の中で、アジア地区の拠点として横浜にアプローチしてきたことによるものである。

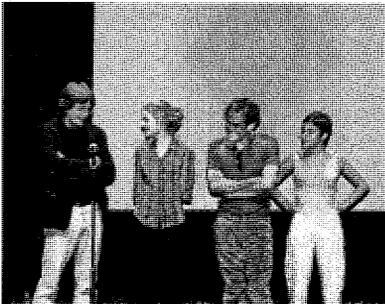
横浜市はコンベンション都市として、国際会議やイベントの開催を招致してきたが、そ

の中で横浜らしい映画祭のあり方を模索していたところでもあった。

また横浜市と姉妹都市として深い交流の歴史をもつリヨン市は、映画を発明したリュミエール兄弟の生誕の地であるとともに、現在でも映画研究機関であるリュミエール研究所や、幅広い映画人養成のための公立の映画専門学校を持つなど、フランスの中でも映像文化の中心地である。この都市間の友好関係もこの映画祭が横浜で開催されるきっかけの一助となっている。

横浜は、いうまでもなく開港都市として海外からの文化をいち早く受け入れるとともに、それを咀嚼し、全国に伝播させていく役割を果たしてきたが、映画もその一つである。明治三十年(一八九七年)三月、現在東京電力関内発電所の建つ地にあった「港座」という

■オープニングセレモニー



■映画上映後のQ&A

はじめに
1 横浜とフランス映画祭
2 1フランス映画祭のこれまで
3 「フランス映画祭横浜」をより生かすために
おわりに

- ① フランス映画祭横浜
- ② 国際エイズ会議
- ③ ヨコハマ都市デザインフォーラム

芝居小屋で初上映されたのは、先にふれたリユミエール兄弟の世界初のフィルム「工場の出口」「列車の到着」など数種類だったが、この映画が製作されたのが一八九五年であるから、わずか二年後の上映であったことになる。

その後、横浜にはいくつもの撮影所が開かれ、また数多くの映画の舞台ともなった映画とのなじみの深い都市として発展してきた。しかし、映画そのものが市民の生活の中で日常的に親しまれていた時代から、テレビ全盛期を経て、最近ではビデオの普及など、映画を取り巻く環境は厳しくなっている。その中で、横浜の映画の歴史を懐かしみ、もう一度新たな形で映像文化の振興を図りたいという熱い市民の声もあり、かくして横浜らしい特徴を持った映画祭としてこのフランス映画祭を本市としても支援していくことになった。

② フランスの映画振興政策

フランス映画祭横浜の主体であるユニフランスと、そのバックにあるフランスの映画振興政策の概略にふれておきたい。

① フランス中央映画庁 (CNC)

芸術・文化国家を標榜するフランス政府は、国家政策として映像文化の振興を図ってきており、そのためにフランス文化省・フランス語圏省の機関としてフランス中央映画庁 (CNC) を戦後間もない一九四六年に設置している。年間約二十五億フラン (日本円で約五百億円) といわれている予算の大半は、政府が映画産業やテレビ局等から制度的に徴収する拠出金により賄われており、映画からは入場料の約一％が、またテレビ業界からは各

局の総売上上の五・五％が、ビデオ産業からはやはり売り上げの二％が徴収されている。

予算は映画産業とオーディオ・ビジュアル産業に助成という形で配分されており、中でも新人監督に対する手厚い資金援助は、映画界全体の若返りと活性化に大きく貢献している。このほか映画館などの興業環境の整備に対する支援、カンヌをはじめとした映画祭などへの支援、さらには監督、撮影技術者、俳優など映画関係者の教育事業、シネマテークでの映画の保存修復など、多彩な事業を行っており、フランス映画の海外でのプロモーションを行うユニフランスもこのCNCの支援をうけて活動している。

④ ユニフランス・フィルム・インターナショナル

横浜での映画祭は昨年度ベースで総予算約二億円、そのうち本市の補助四千万円とその他のかのスポンサー収入を差し引いた金額がユニフランスの負担である。

横浜のほかに、メキシコのアカプルコが主会場となっており、ユニフランスの総予算の半分近くがこの二都市での映画祭の経費として充当されていることから、彼らの横浜に向ける期待は非常に大きい。

フランス映画の主要輸出先は第一がヨーロッパだが、日本、アメリカ市場の確保を大きな課題としており、また最近ではアジアマーケットへの進出ももくろんでいる。今年の映画祭には韓国や台湾などから映画関係者が集まるなど、さらに新たな展開を図りつつあり、フランス映画の「ショーウィンドー」としての効果も発揮しつつある。

2 フランス映画祭のこれまで

① フランス映画祭横浜の特徴

現在わが国には、東京国際映画祭やアジアフォーカス福岡映画祭、山形国際ドキュメンタリー映画祭、など多くの映画祭が開催されている。コンペティション方式のもの、旧作も含めテーマを決めた特集方式のものなど多彩な展開がなされているが、映画の振興とともに、町おこしのな色彩も強いようだ。

フランス映画祭横浜は先にも述べたように新作フランス映画 (日本未公開) のプロモーションを目的としたものであって、他の映画祭とは異なり、むしろ横浜の地におけるコンペティションとしてとらえるべきものである。

プロデューサーや監督、俳優などフランス映画関係者百数十人が一堂に顔をそろえ、各作品の上映ごとに質疑応答の機会を設けるとともにサイン会を開くなど、サーピス満点であること、またこの間マスコミ等のインタビューに応じながら、パシフィコ周辺でくつろぐ様は、街の華やきに大きく貢献している。

また、五月中旬に開催されるカンヌ映画祭の後初めて開催されるだけに、カンヌの受賞作品や受賞者たちが、その熱気をダイレクトに持ち込むことも魅力の一つとなっている。

② 今年の映画祭から

⑦ 全体の概要

第六回を迎える今年は、六月十一日 (木) から十四日 (日) までの間、パシフィコのメインホールを主な会場として開催され、十七本及び短編六本の上映に、総観客数は一万七

表-1 フランス映画祭の実績

開催年度	上映回数	仏代表団 (団長)	客観数	関連事業等
第1回 (H5)	14回	100人 (ジャンヌ・モロー)	14,000人	ランドマーク 関内ホール、能楽堂、大学、2大学
2回 (H6)	15回	200人 (ソフィー・マルソー)	14,000人	
3回 (H7)	15回	80人 (シルビー・ヴァルタン)	14,500人	
4回 (H8)	17回	115人 (イザベル・ユベール)	17,000人	
5回 (H9)	22回	122人 (キャロル・ブーケ)	17,700人	
6回 (H10)	18回	120人 (サビーヌ・アゼマ)	17,800人	

* 短編数本は1回分として計上

千八百人に達した。ことに土日の午後は定員を大きく上回る人々が訪れ、入場を制限せざるを得なかったのは残念だった。

フランス側からは代表団長のサビーヌ・アゼマ氏を筆頭に百二十人近くの監督、俳優らが横浜を訪れ、また今年には「日本におけるフランス年」ということもあり、オープニングセレモニーではシラク大統領からのお祝いのメッセージも披露された。

④映画公開セミナー「日仏映画の今を語る」

フランスはまた日本映画についてのよき理解者であり、厚いファン層を持つ国でもあることから、今回初めての試みとして日仏の映画関係者による公開セミナーを関内ホールで開催した。この映画祭の立役者の一人でもあるジャン・J・ベネックス監督の最新ドキュメンタリー作品「潜水服と蝶」や、今年のカンヌ映画祭短編部門のバルム・ドールを受賞したグザビエ・ジャノリ監督の「インタビュー」などの上映のあと、この二監督に加え「TO KYO EYES」（東京を舞台とした日本人俳優によるフランス映画）のリモザン監督、そして映画評論家・日本映画学校校長の佐藤忠男氏と、副校長でドキュメンタリー映画監督の千葉茂樹氏の五名によるディスカッションを行った。

⑤市民交流事業

フランス映画関係者がここの横浜に多数集まっていることを最大限生かせるよう、また若いファン層の拡大と交流とをねらって、市内の大学で特別講演会が行われた。昨年を引き続き横浜市立大学で開催したほか、慶応義塾大

学日吉校舎でも実施し、それぞれ俳優や監督、さらには慶応大学ではユニフランスのトスカン会長も参加し、日本側としては少々分の悪いはずの恋愛論を中心に、フランス語の授業もかねて講演並びに質疑応答を行い、大好評を博した。

このほかにも、市民無料招待の映画上映や、フランス代表団との交流レセプションの開催、能楽堂での狂言鑑賞と交流会、など多彩な事業を実施した。

⑥フェスティバルとして

みなとみらい地区の、動く歩道からランドマーク、クイーンズモール、パシフィコまでの動線が、各ビルの協力によりフランス映画祭の三色旗で飾られ、桜木町の駅から会場まで、映画祭の雰囲気作りできた。さらにクイーンズモールの緑のギャラリーではフランス映画人の写真展が、またランドマークではポスター展が開かれるなど、面的な広がりや華やきもたらされたことも今年の大きな成果であった。

⑦1次年度に向けて

①会場

これまで六回ともパシフィコセンターのメインホールを会場としてきたが、千人定員であるため、土日の午後などは大幅に定員を上回っており、より広い会場とするか、または複数回の上映とするかなどを検討していきたい。

②開催時期

上映作品は五月のカンヌ映画祭の結果をみて決定するため、内容の周知に充分時間がか

けられないことが例年課題となっていた。今後は開催時期を一〜二週間ほど遅らす方向で検討中だが、来年度は会場の都合により、例年どおりの六月十日から十三日に開催する予定である。

⑧実施体制

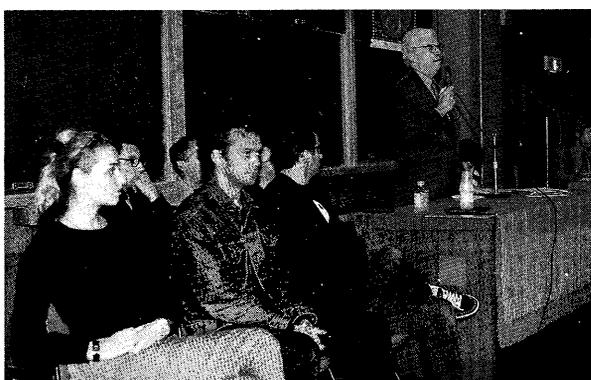
フランス映画祭の実行組織は、表12（47ページ）のようになっているが、今回から横浜市側の体制は（財）横浜市文化振興財団が中心となって動き始めた。映画祭本体は主としてユニフランスが運営するが、関連事業などは財団のノウハウによるところが大きく、今後横浜の映像文化振興の観点からもその専門性を大いに発揮していくことが期待される。

3 「フランス映画祭横浜」をより生かすために

①コンベンションとして街のにぎわいのために

初夏の横浜の風物詩としてすっかり定着してきた感があり、回を重ねるごとに関連の事業も広がりを見せているが、コンベンションとしての可能性をまだ十分には発揮できていないようだ。総合芸術といわれている映画だけに、切り口は様々あるはずで、文学、ファッション、食文化、はたまたユーロなどの経済問題など、もっと欲張った企画を盛り込んで、層の厚いフェスティバルにしていく必要があると思う。

また開催会場などを、みなとみらい地区のほか関内や山下地区、横浜駅周辺、元町などに広げていけば、街全体としての雰囲気づく



■講演会（慶応大学日吉校舎）



■サイン会

りができるのではないか。

フランス映画の紹介を核としながら、もつと様々な交流の機会を創出し、横浜の街のにぎわいをさらに一層演出するために、横浜の関連企業や市民グループなどと連携しながら次年度の開催に向け検討を重ねていきたい。

② 横浜における映像文化振興のために

フランス映画祭が、即横浜の、日本の映像文化振興につながるわけではない。

斜陽産業と言われて久しい日本映画であるが、昨年はカンヌ映画祭で今村昌平監督の「うなぎ」がパルム・ドールを、ベネチア映画祭では北野武監督の「HANA-BI」がグランプリを受賞、さらには国内で「ものけ姫」が空前の興行成績をあげるなど、久々に明るい話題が続いた。しかし今年九月黒澤明監督が亡くなった際に指摘されたように、映画製作をめぐる日本の環境は依然として厳しく、彼のように映像面でのクオリティにこだわった製作はもう不可能ではないか、とも言われている。資金面での困難のほか、撮影場所をめぐる許可を取るための苦労話など、映画作りの環境は決して好転してはいない。

しかし、徐々にではあるが自治体レベルでの映画振興策もでてきている。(注1) また、横浜には来年二月で二十回目を迎える市民手づくりの映画祭「ヨコハマ映画祭」があるが、この映画祭での受賞は、映画愛好者だけで選

考するだけにビュアで、日本映画関係者への大きな励ましとなっている。フランスのように国を挙げての映像文化支援をすぐに望むべくもないが、こうした市民サイドの実績や自治体の試みを積み上げながら、わが国の映像文化支援のコンセンサスを形成し、総合的な施策立案につながればと思う。

さて、来年一九九九年はリヨン市と本市の姉妹都市四十周年にあたる。ユニフランスがフランス映画の日本への紹介であるならば、規模こそ小さくとも日本映画のプロモーションを横浜(日本)からリヨン(フランス)に仕掛けていくこともあっていいのではないか、などと新機軸を講じていくことも考えている。

おわりに

フランス映画祭での経験やその後の関係者との接触の中でつくづくと思ひ知らされたのは、かの国の確固たる自国文化に対する自負心の高さと、それを維持するための努力とである。それは国際的にも幅広く領域を広げており、日本の映像に限っても溝口、成瀬、小津、黒澤は言うに及ばず、今村、大島から北野まで、的確な批評分析とともに組織的なライブラリー保存も行っている。

東京日仏学院院長である、マリー・クリスティーヌ・ドウ・ナヴァセル氏はポンピドゥーセンターの映像責任者でもあった方だが、先日、日仏の映画交流の歴史を語った講演の中

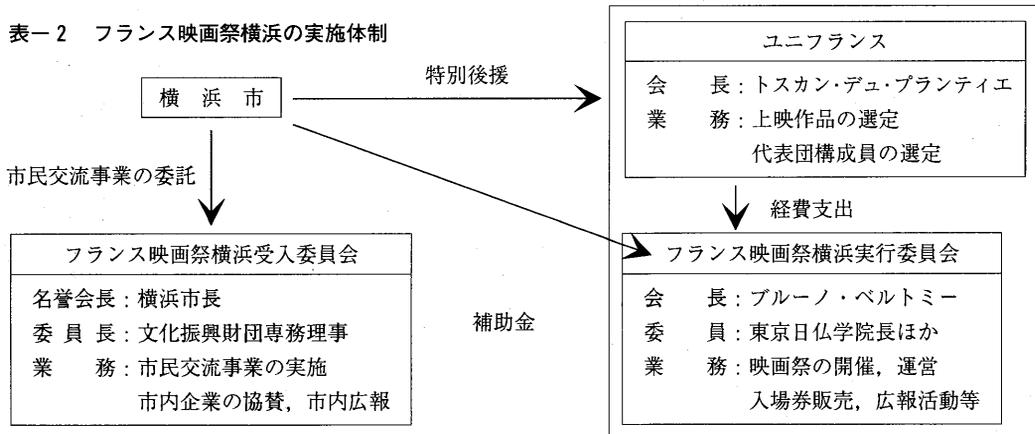
で、日本文化のある一面を次のようなエピソードで語られた。第一回のフランス映画祭の会場での、「フランス映画の中で溝口の名を初めて知り、こんな素晴らしい監督が日本にいたことを教えてくれたことに感謝します。」との言葉であるが、これは自国の文化に対する啓発、伝承に努力してこなかったわが国の文化風土に対する実に厳しい指摘でもあったようにも思われた。

農産物自由化ばかりが報じられた記憶のある一九九三年のガット協議の中で、フランス政府が映画やAVの輸入自由化問題に際し、「文化的例外措置」を確保したことも、この国らしかったと思う。ユーロの発足を目前に、また失業率一〇%を超えるなど経済的苦境のさなかにあっても、こと文化に関しては、単に保護するだけでなく積極的な輸出産業としても位置づけ多くの予算を依然として確保し続けていく姿勢は、市場万能主義が勝利を占めつつあるように見える今日にあって、大いに示唆に富むものといえよう。

財政状況が厳しくなる中、文化関連部門は真っ先に矛先が向けられるというが、しかし「人はパンのみにて生きるにあらず」。人々の内にある力や可能性を引き出し、それを都市の活力や様々な機会の創出につなげていく、新たな都市戦略、公共的施策としてその位置づけをしかと問い直す必要があると考える。

△ 市民局文化振興課長 ▽

表一 2 フランス映画祭横浜の実施体制



(注1) 平成八年群馬県が資金援助を行い、群馬を舞台とした映画「眠る男」(監督：小栗康平)を製作。
隔年開催の京都映画祭(平成九年)の一環として、京都市が映画祭のない年に一億円を上限に映画製作費を助成。現在「いちげんさん」(監督・製作：森本功)を製作中。